13　関場不二彦の事蹟（一）

―開業初期の病院経営―

○[1]吉田　信・[2]島田保久・[3]津田晴美・[4]松木明知

関場不二彦は慶応元年（一八六五）会津若松で生まれ、明治二十二年（一八八九）帝国大学医科大学を卒業、医科大学第一医院の助手としてスクリパのもとで外科を研鑽、同二十五年九月公立札幌病院長に就任、翌二十六年札幌で開業した。業績として外科学では第六回日本外科学会総会での宿題報告、日本外科全書の分担執筆などあり、また医史学では『アイヌ医事談』『西医学東漸史話』など多くの著書、論文を発表した。さらに札幌市医師会と北海道医師会の初代会長としても北海道の医事に貢献した。昭和十四年（一九三九）逝去。昭和四十一年（一九六六）生誕百年記念の一つとして『関場理堂選集』が出版された。しかし今なお不明なことが多々あるのが現状である。

最近、関場自身の手になる「病院経営ニ関スル書類」と題する文書を発見した。その中には「病院沿革」など従来知られていなかった事実を物語る貴重な史料が入っており、それを紹介すると共に二、三の考察を加えたい。

これらの文書は縦三十二糎、横二十三・五糎の和紙の袋に入っており、中央に自署した題簽がはってある。その中の書類の一つが「病院沿革」で、十六丁の和紙に明治二十六年十月十五日から同三十三年十二月までの病院に関する記録が書いてある。これによると、

明治二十六年十月十五日南三条西六丁目十一番地の自宅で開業、豊平村に出診所を設けた。医員は阿部元寿、外来は自宅に一日四十人位、出診所は隔日午後阿部が診療、一回二十人位であった。十一月二十三日大通西四丁目六番地に移転、二十五日関場医院と改称した。改称とあるので開業当初は別の名称があったことになるが、医院名は不明である。十二月守谷健之助が医員になった。

明治二十七年一月二十九日から二月十八日まで上京した。一月に宮地金吾が医員として勤務（四月古平病院長に転出）、四月加賀屋武留が医員として勤務（八月福山病院へ）し

た。なお一月看護婦長吉村良子とあり、初めて看護婦の名が出てくる。七月一日北海病院と改称、自著「我二十年」に院勢は非常な隆盛を極めたとある。この年の外来新患者数五、二〇三人であった。

明治二十八年一月院主となり病院設立の件を願い出て二月六日認可された。四月小樽診療所を設け、尾形碧を主任とした。同月三沢三代三郎が医員となった。この年の外来新患者数は七、〇三四人であった。

明治二十九年三月三沢が浦河村医となり、代わりに高林秀貞が医員となった（六月下旬小樽へ）。六月病院拡張の一環として病室七室（六十名収容）が新築落成し、官民四〇〇人が集まり披露宴を挙行した。

明治三十年三月二十四日病理解剖を行った。北海病院として初出の解剖記事である。六月診療室、医局、薬局、手術室、病室の新築を行った。八月医員助手の渡辺貞佳（二十八年二月から勤務）が上京、済生学舎に入った。

明治三十一年一月十三日医学士竹中成憲を院長とし、関場は二十九日上京、ドイツ遊学の途についた。留守中院務の紛争で四月二十八日竹中院長以下医員が辞職、五月三日医局は秀島孝副院長と外科助手の大久保武志だけとなり、七月十日北海病院を閉じた。十一日名称を北辰病院とし、院長竹村鋌次郎医学士、医長大内小六で再開した。十月帰国。十一月組織を改め、自ら院長兼外科主任となり、竹村を内科主任とした。十二月北辰病院として初めて病理解剖を行った。

明治三十二年一月竹村内科主任が辞職、内科主任も兼務した。医員は大内小六、秀島孝、助手大久保武志。五月院主に父の忠武を迎え内部紛争が全くなくなった。八月秀島を検梅駆梅の担当とした。九月助手の大久保武志を院費で済生学舎に入れた。十月浦河の渡辺貞佳を医員とし、大内が幾春別炭山医員になった。十一月伊達紋別地方に赤痢流行、長佐古鎌太郎医員を道庁検疫委員として派遣した。

明治三十三年二月宮地良治が副院長になり、駆梅院と藤野出診所の管理者となった。九月駆梅院との関係を絶ったが、十一月渡辺医員を仮駆梅院長とし、宮地副院長を本院勤務とした。

以上、北海道の医界の重鎮であり、文化人であった関場不二彦について、新資料を中心に文献的に考察を加えた。

今後も資料の発掘に努めていきたい。

1)(札幌市吉田病院)
2)3)(札幌市)
4)(弘前大学医学部麻酔科)

14 Anaesthesia の命名

中原　泉

Anaesthesia の名称は、Oliver Wendell Holmes（一八〇九―九四）によって命名された、というのが定説とされている。しかし、この命名の由来やその内容に関しては、詳らかではない。

一八四六年十月十五日、歯科医師　W. T. G. Morton（一八一九―六八）は、ボストンのマサチューセッツ総合病院（MGH）において、硫黄エーテルを用いて全身麻酔に成功した。

この新法の開発は、またたく間に全米に広まり、欧州に伝播した。十二月十日はやくもロンドンで、歯科医師 James Robinson が抜歯手術に応用、二十一日には著名な外科医 Robert Liston が大腿部の切除手術に用いた。